

「健全な言論プラットフォームに向けて ver2.0」の公表(5月29日)について

山本龍彦(慶應義塾大学)

1. Ver.2の主な変更点

※Ver.1: アテンション・エコノミーが構造的要因となって、作為的・他律的な「情報偏食」(システム1が巧妙に刺激され、反射的に「反応」してしまう世界)が生じており、それが様々な課題(フェイクニュース、誹謗中傷、エコーチェンバーetc.)を惹起しているのではないか。情報の摂取行動を意識することの重要性(さまざまな情報に触れることで「免疫」を獲得すること)や、かかる行動を意識できる環境構築の重要性を主張。

(1)「情報的健康」の定義を、より包摂的なものに変更:WHOの「健康」定義を意識

(2)生成AIをめぐる論点の追加:①もつとらしさ(何を食べさせられているかわからないが、まあまあおいしい)、②情報津波etc.

(3)脳神経科学的観点からの検討:ニューラル・デコーディング(neural decoding)技術の発展。「読心」。

(4)リテラシー・教育に関する記述の充実:「食育」とのアナロジーの掘り下げ。「反自然」(?)への挑戦の歴史。

(5)広告をめぐる論点の追加:アドベリフィケーションの重要性(要するに、お金)

(6)通信事業者をめぐる論点の追加:ゼロ・レーティングとアテンション・エコノミーとの関係(通信事業者も間接的に関連)

(7)「不健康」がもたらす具体的害悪の描出&基礎調査:個人／社会(民主主義)／安全保障への影響、基礎調査(「エコーチェンバー」「フィルターバブル」、どちらも7割前後が用語を聞いたこともない。政治的傾向では約半数、コンテンツ的傾向では約8割の回答者が特定の傾向のニュースが多いと回答。自身の情報環境が「偏っている」という認識。フェイクニュースについては、少なくとも何らかの方法により現状よりも減少させるべきと考えている個人が9割を超える)

(8)実装に向けた施策の提案(→3)

【共同代表執筆者】

鳥海不二夫(東京大学大学院工学系研究科教授)

山本龍彦(慶應義塾大学大学院法務研究科教授、KGRI副所長)

【共同執筆者】

高口鉄平(静岡大学学術院情報学領域教授)

小久保智淳(慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程・研究員、KGRI 所員)

酒井邦嘉(東京大学大学院総合文化研究科教授)

鈴木雄也(BuzzFeed Japan 株式会社)

平和博(桜美林大学リベラルアーツ学群教授)

千葉貴志(株式会社電通)

長倉克枝(株式会社日経 BP 日経クロステック編集記者)

林秀弥(名古屋大学大学院法学研究科教授)

藤代裕之(法政大学社会学部教授)

馬籠太郎(株式会社電通デジタル)

三浦麻子(大阪大学大学院人間科学研究科教授)

水谷瑛嗣郎(関西大学社会学部准教授)

山口真一(国際大学グローバル・コミュニケーション・センター主幹研究員・准教授)

結城東輝(弁護士／スマートニュース株式会社、法律事務所 ZeLo・外国法共同事業)

2. デジタルプラットフォーム事業者の基本原則

- ・「認知過程の自由」への配慮
- ・フィルターバブル対策(レコメンダー・システムに対する主体性の確保etc.)
- ・フェイクニュース対策(ファクトチェック機関との連携etc.)
- ・公共的アルゴリズムの「例外的」実装(選挙等／災害／パンデミック／未成年者保護／有事)
- ・透明性確保(レコメンダー・システムのロジック等の透明性、「情報的健康」へのスタンスの可視化)
- ・責任体制・ガバナンス(倫理委員会etc.)
- ・実態把握

3. 実装に向けた今後の取り組み

【技術的施策】

- ① ユーザーの「情報的健康」度を測定し、結果を提示するためのシステムの構築・実装
- ② 情報偏食の仮想的な追体験をするためのシステムの構築・実装
- ③ 自らの「情報的健康」度を実感できるアバターの作成・実装
- ④ 提示される情報の偶然性(セレンディピティ)や多様性を保つ適切なアルゴリズムの開発
- ⑤ 「情報的健康」をめぐる人間の生体反応の測定方法に関する研究開発

【社会的・制度的施策】

- ① 「情報的健康」の趣旨を組み込んだリテラシー教育の方法論および教材の開発
- ② 食育の歴史(食事のリテラシー)との比較を踏まえた、「情報的健康」に関する社会規範醸成についての研究
- ③ 「情報的健康」の観点から生成 AI の適切な利用方法について規定した原則ないしガイドラインの検討
- ④ 「情報的健康」の実現に関連した技術の実装を促すインセンティブ設計の検討
- ⑤ 「情報的健康」の趣旨を踏まえた、新たな「放送」概念、「放送」制度に関する研究
- ⑥ 「情報的健康」の実現に向けた国際的な連携(海外の大学・研究機関や国際的な研究組織、世界保健機関など国際機関との連携を含む)

【技術と制度の双方にまたがる施策】

- ① OP(オリジネータープロフィール)の開発・実装の支援
- ② アドベリフィケーションのためのシステムの設計・実装
- ③ 公共的な視点を組み込んだレコメンデーション・システムの開発・実装
- ④ 公共的な視点からエンゲージメントを獲得できるプラットフォームの設計(例えば、「情報的健康」を意識した情報摂取行動をとったユーザーには「ポイント」を付与し、その「ポイント」を他の記事を読んで支援したいと考えたローカルな NPO 団体などにクラウドファンディングできるような仕組み)
- ⑤ 「情報的健康」の実現に資する技術および制度に関するコンテストの実施